

新潟市教育相談センター
新潟市特別支援教育
サポートセンターだより

も え ぎ

第 124 号

令和7年7月25日
新潟市教育相談センター
新潟市特別支援教育サポートセンター
新潟市中央区西大畑町458番地1



「タイパ」では 手に入らないもの

子ども支援部 長澤 靖子

私が魅力的に感じてしまう「コスパ」と「タイパ」という言葉。「コスパ」は「コストパフォーマンス」の略で、支払った金額に対して、それ以上の価値や満足度が得られることを指します。「タイパ」とはタイムパフォーマンスの略で、費やした時間に対する効果や満足度を表す言葉です。つまり、「タイパが良い」とは、短い時間で高い満足度を得られた場合のことを指します。

この「タイパ」を魅力的に感じるのは、私だけではないようです。『タイパの経済学』の本の著者、廣瀬涼さんは、Z世代を中心に広がっている「タイパ」という消費行動を、著書の中で、経済学の視点から分析していて、大変興味深かったです。近年、サブスクの拡充など、圧倒的な情報量を消費可能にしたプラットフォームが世の中に溢れています。さらに、人々のコミュニケーションがそのコンテンツを通じて行われることが多くなり、コミュニケーションを円滑にするためには膨大なコンテンツを消費する時間が必要となり、「タイパ」が求められるようになったそうです。「タイパ」を重視すれば、短時間でその物事に精通した気分になれるので時間を効率よく使っているように感じます。でも、

「タイパ」で生み出された自由時間が決して有効活用されているわけではなく、人はまた、本当は必要だと感じてない新たなコンテンツを探し、消費するだけの時間になっている現象が起こっているという残念な結果も出ています。筆者は、「コスパ」の合理性は認めつつ、「タイパ」の合理性については疑問を呈し、「タイパ」を追究する現代人に警鐘を鳴らしています。

確かに、短時間で簡単に手に入れた分、感情に揺さぶられたり、感情が沸き上がったりすることは少なくなります。感動に満ちた出来事は、そこに至るまでの過程や余韻の時間も含めるから感動するので。人と人との関係づくりや心の満たされ方にも似ているところがあると私は思います。心は時間をかける中で、ふわりとほどけ、じんわりとエネルギーがたまります。そうやってゆっくり創り上げたアイデンティティは、揺るがないものになると思います。教育相談センターは、そこに至るまでのお手伝いを伴走するように、その人に合わせて支援していく場所です。ですから、教育相談センターは「タイパ」ではない相談機関です。

教育相談センターとじっくりと関わり続けた多くの方々が、社会的な自立に向けて前へ進むことができるようになっていきます。大切なものは「タイパ」では手に入りにくいと改めて感じました。

出典：「タイパの経済学」廣瀬 涼 著 2023 幻冬舎新書

令和7年度「教育相談研究会」のお知らせ

当センターでは、毎年11月に、教育相談研究会を開催しています。昨年度は、以下の内容で研究会を開催しました。

「今見えてくる、不登校の課題と支援の在り方 ～居場所づくりから関係づくりへ～」

不登校児童生徒に対してどのような支援が必要か、センターでの取組、横山先生（新潟大学）の講義、参会者同士の情報交換を通して不登校支援の在り方を考えました。

今年度は、保護者・児童生徒の不安をテーマにこれからの不登校支援について右の内容で研究会を開催します。参加者の皆様と一緒に考えていきたいと思います。

令和7年度 教育相談研究会

「今見えてくる不登校の課題と支援の在り方」 ～不安を抱えた保護者・子どもへのアプローチ～

<研究会アドバイザー>

新潟青陵大学 准教授 小林 大介 様

不安を抱えた保護者・児童生徒への社会的自立に向けた支援方法について一緒に考えます。

<開催日時> 令和7年11月5日（水）

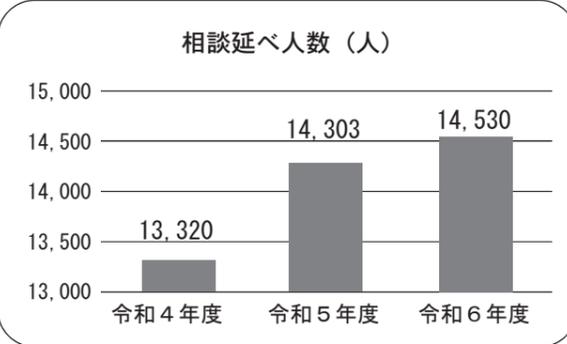
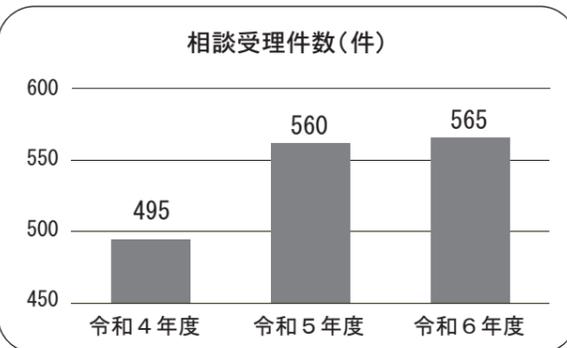
14時00分～16時40分

<会場> 新潟市教育相談センター

令和6年度 相談集計特集

教育相談センターと各区(北・江南・秋葉・南・西蒲)教育相談室では、児童生徒及び保護者への相談支援として「来所相談」「子ども支援室」「訪問教育相談」を行っています。「夜間『学習・進路相談室』」「いじめSOS電話相談」は教育相談センターのみで行っています。この度、令和6年度の相談状況がまとまりましたのでお伝えします。

1 年間相談受案件数は565件

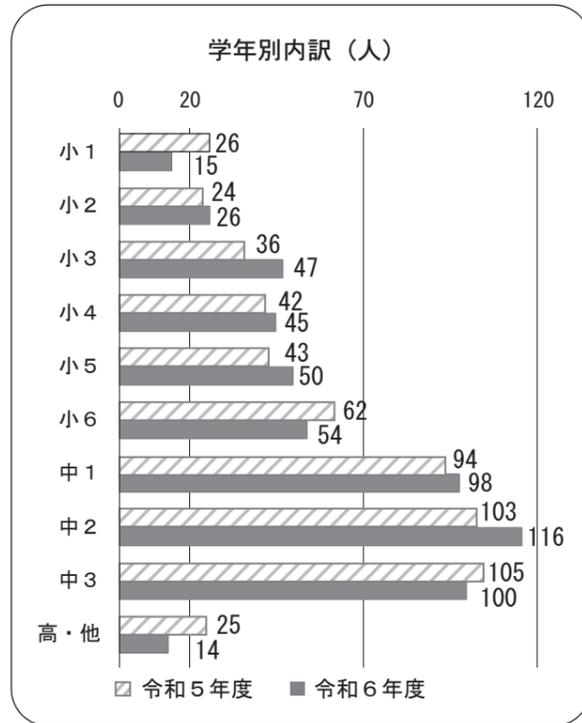


相談受案件数とは、「来所相談」と「訪問教育相談」の受付件数です。年間で何回相談しても1人の相談者は1件として集計しています。相談延べ人数は、実際に相談した人の総計です。令和6年度は相談受案件数が微増、それに伴い相談延べ人数が増加しました。本格的な学校・社会活動が再開した令和5年度より引き続き相談が多い状況から、当センターを必要としてくださる方が多数いらっしゃる事が分かります。

2 学年別では中学生が全体の54%

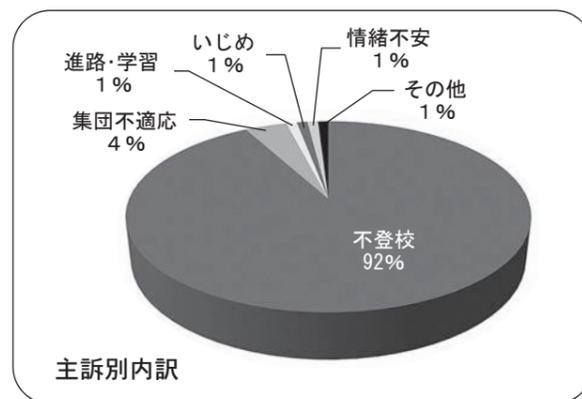
令和6年度相談受案件数を学年別で見ると、中学生は合計314名で、全体の約54%を占めました。

例年、中学生が多くなる特徴があります。令和5年度と比較すると、学年ごとでは数値に若干の差がありますが、全体的には同じ傾向と捉えています。



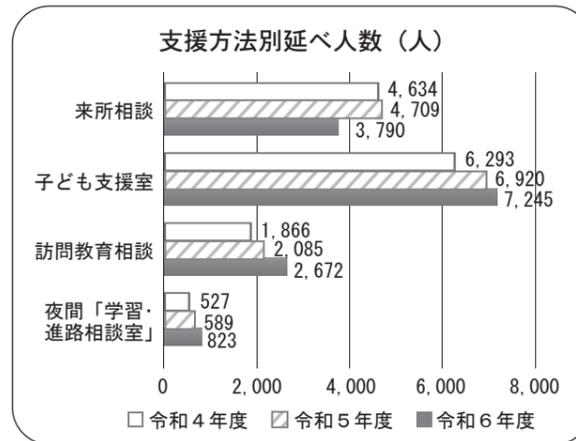
3 主訴別内訳では不登校が92%

主訴別では「不登校」が圧倒的に多く、受案件数全体の92%を占めています。当センターの主な業務の一つが不登校支援であることが、この数字からもお分かりいただけることと思います。主訴は不登校であっても、背景には他の悩みが絡まり合っていることがあります。相談者の話を丁寧に聴いていく



と、友人関係、集団に入れない、進路・学業、家庭環境・親子関係、学校不信など、悩みは様々です。全体像をしっかりと捉えることに努めながら、相談者に寄り添った相談・支援を行うよう心掛けています。

4 支援方法別延べ人数の推移



相談延べ人数を支援方法別で確認してみました。子ども支援室と夜間「学習・進路相談室」のように、通室する児童生徒に対人関係や学習面などを直接支援することが当センターの業務の特徴です。

令和6年度、来所相談は減少したものの、子ども支援室の支援は増加し、夜間「学習・進路相談室」支援は1.4倍も増加しました。

訪問教育相談はアウトリーチ型支援(出向いての支援)を行っています。自ら家から出ることが難しい児童生徒を、社会や学校に繋ぐための支援を行っています。令和6年度は大きく増加しました。増加傾向にある依頼数に対応しながら、訪問教育相談員が回数を重ねて足を運ぶことで、児童生徒と対面できるように取り組んでいます。

5 令和6年度再登校・進展調査

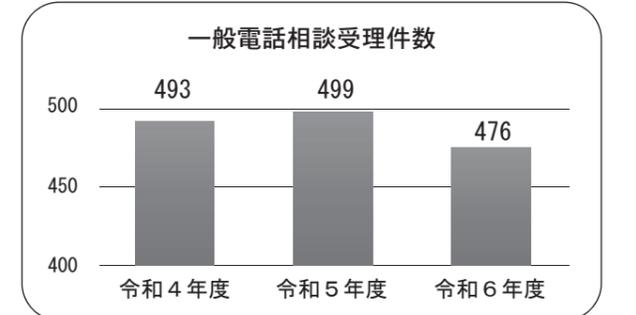
当センターとしてここで扱う「再登校」とは、前述の支援方法の利用前後を比較したときに、学校に登校した日(別室・SSR、放課後登校などを含む)が増えていることをいいます。また、「進展」とは再登校までいかないものの、自分なりに表現ができる前向きな状態になっていることをいいます。昨年度、子ども支援室には145名の通室生がいました。

そのうちの70%にあたる102名が「再登校」へ22%にあたる32名に「進展」が見られました。当センターや各区教育相談室の子ども支援室の利用をきっかけに、児童生徒が心のエネルギーを蓄え、前に踏み出す機会が増えたと捉えています。

訪問教育相談は58名の利用がありました。そのうちの67%にあたる39名が「再登校」へ、28%にあたる16名に「進展」が見られました。相談員と対面で過ごす中、その子に寄り添った支援を行うことで、子ども支援室と同様に心のエネルギーが蓄えられた児童生徒が多くいました。

6 一般電話相談は減少

一般電話相談は令和5年度までと比較し、減少に転じました。いじめSOS電話相談も令和6年度は174件(令和5年度200件)と減少しました。近年はSNSを含む様々な相談窓口があり、相談者が他の手段を選んでいることが理由の一つとして考えられます。大事なことは、ご不安やお悩みを抱えている相談者が適切な機関につながることです。当センターも、引き続き様々な機会を捉えて広報活動等に努力してまいります。



相談しませんか

不登校支援として、教育相談センターをご利用ください。新潟市立学校が保護者に紹介する際には、C4th 書庫にあるチラシをご活用ください。関係機関等が紹介する際には、「新潟市教育相談センター」と検索していただくと、当センターと各区教育相談室の紹介ページになりますのでご活用ください。

新潟市教育相談センター
Tel 025-222-8600

大学・市教委連携教育相談事業

研究推進部主任 庄司 宗由

大学・市教委連携教育相談事業は、教育相談センターの職員や各区教育相談室職員が「相談内容に関する専門的な指導・助言を受け、教育相談及び子ども支援に関する資質の向上を図る」ことを目的に行っています。今年度で42年目を迎えました。

昨年度は、専門的な知見による講義を6回、事例検討会を14回、研究会指導を3回行いました。

今年度は、教育相談で最も大切な『見立てや傾聴』、現代的な課題である『自傷、希死念慮への対応』、『トラウマの理解と支援』などの講義や事例検討会、研究会などを通して学びを深めます。

来所者へのより良い支援に生かしていけるように、職員一同、努めてまいります。

～ご協力いただいている大学の先生方～

<新潟青陵大学>

- ・教授 伊藤真理子 先生
- ・教授 浅田 剛正 先生
- ・准教授 佐藤 修哉 先生
- ・准教授 小林 智 先生
- ・准教授 小林 大介 先生

<新潟大学>

- ・教授 田中 恒彦 先生
- ・教授 有川 宏幸 先生
- ・教授 村中 智彦 先生
- ・准教授 入山満恵子 先生
- ・准教授 佐藤 友哉 先生
- ・准教授 瀧井 美緒 先生
- ・助教 横山 仁史 先生

心 理 部

『みたてのくみたて』

心理部主任 太田 康文

ケースの支援を考える際、私は『見立て』を大切にしています。普段の生活で『見立て』という言葉はあまり聞き慣れないかもしれませんが、客観的な事実や現象を材料に、ケースを主観的に捉えて仮説を立てる作業を指します。いくつかの客観的な事実から「私はこう思う」と一人称で表現することが『見立て』の作業で大切なことです。

皆さんは、田中達也氏をご存じでしょうか？（標題でピンときた方もいるでしょうか。）様々な日用品を別の物に『見立て』た作品を数多く発表されています。例えば、田中氏の作品を通すと、野菜の玉ねぎが土俵やティンパニ、のび太くんの涙に見えてくるから不思議です。

玉ねぎを玉ねぎとして表現するのではなく、「土俵に見える」「涙の軌跡に見える」等、自身の主観的な感性を大切に作品として昇華しています。また、その田中氏の見立ての感性に多くの人が共感していることもすごいことだと思います。

訪問教育相談の活用を

訪問教育相談部主任 諸橋 徹

こんな児童がいます。集団で楽しそうに話しているクラスメイトを見ると自分の悪口を言っているのではないかと考えてしまいます。また、すれ違った友達が自分を見ていて、自分は何かおかしいのではないかと心配になってしまいます。その児童は、いつも周囲が気になり、集団の中にいることに疲れ、登校できなくなりました。

小学校時代、学級のリーダー的な存在で、友達から頼りにされていました。しかし、中学校に進学し、学習が難しいと感じるようになり、徐々に自信をなくし、登校できなくなった生徒もいました。

『登校したい。でも、できない。』こんな思いで苦しんでいる児童生徒がいるのではないのでしょうか。

訪問教育相談員は、登校できない児童生徒の支援を行います。自宅等に出向き、遊びや学習など、その子のやりたいことを一緒に行い、コミュニケーションを図ることで、社会的自立のお手伝いをします。また、保護者の不安や悩み、要望を伺い、児童生徒への支援内容を一緒に考えていきます。

訪問相談に迷われている保護者のために、『お試し訪問相談』もあります。まずはお試しで体験し、開始するかどうかを判断していただける制度です。是非、訪問教育相談の活用をお願いいたします。

相談者の困難を抱えた状態を聞き手が主体的に捉えて伝え返す際に、田中氏の作品のように相談者の共感を得られる『見立て』ができると、信頼関係が生まれ、社会的自立のイメージを共有しやすくなるのではと思っています。

心理部では職員の『見立て』の力を高めるお手伝いができるよう、年に1度拡大心理部会（勉強会）を開催し、組織的なアセスメント力の向上に努めています。心理部の活動を通じて、相談者の社会的自立のお手伝いできれば幸いです。

参考：田中達也『みたてのくみたて』ダイヤモンド社 2024.7

「まあ～いつかの会」

教育相談センター・各区教育相談室の通室生保護者や来所相談に来ている保護者が集い、日頃思っていることを自由に語り合う会です。申込不要で出入り自由です。お気軽にご参加ください。

【今後の予定】 ※いずれも、13:30～15:00

9月4日(木) 東区プラザ(ぐみの木教室 東区分室)

11月13日(木) 教育相談センター

1月16日(金) 教育相談センター